これからも、まちの「意志」を、芝居を通して伝え続けていきたい。

まちが物語になる理由。

まちというのは、そこに〝意志〟があるからこそできていくもの。「ギンギラ太陽〝s〟」をやっていると、あらためてそう気づかされます。そこを素敵な場所にしたいという意志を持って頑張った人がいて、そうあり続けようという意志を持って関わっていく人がいて、その「場所」は「良いまち」になっていくのだと思うんです。例えば天神は、私にとっては物心ついた時から楽しくてにぎやかなことが当たり前のまち。でも実は昔、その片鱗すらない場所だったと知ったのは「ギンギラ」で芝居をしたのがきっかけです。もともとは畑や田んぼだらけだったところに岩田屋呉服店の中牟田さんがそれこそ決死の覚悟で九州初のターミナルデパートを作り、紙与呉服店の渡辺さんが私財を投げ打って線路を作った、一人一人の意志と、それを支えた人々の思い、そんな歴史や幾つものドラマがあるからこそ天神というまちは物語になるし、みんなの情熱であの「景観」は作られてきたんですよね。

「博多どんたく」という原点。

「地元福岡の皆さんに楽しんでいただく地産地消のエンターテインメント」というテーマを掲げ歩み始めた劇団も来年で15周年を迎えます。創設当時は「〝地産地消〟の芝居なんてお客さまは観たいだろうか。それ以前に、みんな自分のまちやその物語にどれほど興味を持っているのだろうか」と正直、不安でいっぱいでした。でも今では、ありがたいことに1カ月のロングラン公演で約1万人の皆さんに観ていただけるようになった。芝居を通して、物語を通して、建物や道路、まちを支える人の思いをしっかり受け止めてくれる、そんな福岡の皆さんの思いも感じます。また「博多は芸どころ」と昔からいわれますが、これは芸をやる側だけの話でなく、その芸を面白がって応援してくれる環境があってこそ。その原点は、と考える時思い浮かぶのが「博多どんたく」ですね。祭りに参加する人が皆、演者であり観客にもなる。みんなで楽しみ、協力したり応援したりするあの光景。思えば、私達の芝居を面白がってくれる皆さんも、まちへの思いを共有してくれているという意味でいうと、「ギンギラ太陽〝s〟」の活動に参加してもらっているのではないかという気がします。

人とまちの距離を近づけるきっかけに。

せっかく住んでいるのならば、興味のないものに囲まれているよりは、そのまちの建物や自然といった様々な「景観」に興味を持った方が楽しいのではないでしょうか。都市景観賞は様々な「景観」の魅力に気づくきっかけをくれる賞です。同様に私達が作る芝居や物語も人とまちとの距離をぐっと近づけるきっかけになればと思います。

ギンギラ太陽〝s主宰
大塚 ムネト
Otsuka Muneto

小郡市生まれ。擬人化された福岡のビルや乗り物が登場する作品が特徴の劇団では出演・作・演出・かぶりモノ造型を手がける。近年は全国ツアーも行い、監督作品「ボーン・トゥ・ラン～夢の超特急」が今年全国公開。福岡県文化賞、福岡市民文化活動功労賞、ギャラクシー賞など受賞。

海の風景、花電車、放生会。子どもの頃の思い出が今に繋がっている。

福岡らしい景観といえば、海。

私は、福岡で生まれ育ち、小学校の5年生までは箱崎の近くの坂本町、6年生からは西新に住んでいました。だから、福岡もずいぶん変わったな、というのが正直な感想です。現在は月に2、3回のペースで東京と福岡を往ったり来たりしているので、その風景にもだんだん馴染んできました。私にとって福岡らしい景観といえば、それはまちがいなく海です。子どもの頃、私の周りにはいつも海がありました。今、一番のお気に入りは、都市高速、特に荒津大橋から見る博多湾の景色ですね。ちょうど都市高速道路を挟んで、海の反対側には福岡のまちも高いところから見渡せる。その眺めにはとても魅力を感じています。だから、実家のある室見に帰る時、私は必ず天神からバスに乗るんです。最初の頃は無粋だと思っていた海岸線を走る都市高速道路も、今ではこれはこれで福岡の新しい景観を生み出すひとつの要素なのだな、と思っています。

放生会が、私の芸人のルーツ。

新しい景観が生み出される一方で、失われるものが出てくるのは寂しいですね。やはり、浜辺がなくなったのは残念です。百道中学に通っていた時は、運動場のすぐ向こうが海岸線だし、坂本町に住んでいた頃は、近くの海岸線に松林があって、その向こうの貝塚はその名の通り貝殻だらけの浜辺があったんですよ。なくなったものといえば、花電車もありますね。家の近くに西鉄電車の車両基地があり、夜、そこに3台くらい続けて花電車が入ってくるんです。それはもう言葉では表せないくらい美しかった。子どもの頃の思い出といえば、放生会も忘れられません。実は放生会が、私の芸人のルーツだと思っているんです。参道にはたくさんの屋台が並んでいて、バナナの叩き売りがあったり、それから少し外れたところには見世物小屋があって、どん詰まりにはお化け屋敷。好奇心いっぱいでしたし、その体験が今の仕事にも繋がっているんですね。

街づくりに、福岡らしいテーマやコンセプトを。

福岡のよさは、新しいものを柔軟に取り入れ、その一方で伝統も大切にするという二面性にあると私は思っています。〝進取〟と〝古典〟の融合とでも言うのでしょうか。でも、最近の福岡のまちを見ていると、ミニ東京化しているような印象も。そこで、なにか福岡らしいユニークなテーマなりコンセプトを決めて、これからのまちづくりを進めたらよいのでは、と思ったりもします。発想の豊かさや何かを思いきってやるエネルギーは、たぶん他のどんなまちにも負けない。古くからある文化の中に新しい発想を取り入れることで、これからも福岡らしい景観が生まれてくると思います。

講談師
神田 紅
Kanda Kurenai

筑紫野市生まれ。福岡県立修猷館高校卒業。女優・映画評論家・エッセイストなどとしても活躍する一方、1997年からは福岡市内の小学校で子ども達に「金印物語」を講談、国宝・金印のレプリカを贈る活動を続け、2002年から福岡スピリッツの『語り部』を養成したいと福岡紅塾も開塾。日本講談協会会長。